

—東日本大震災—

市議の勧めた『非常通路』が、越喜来（おきらい）小学校の児童を救った。

岩手県大船渡市三陸町の私立越喜来（おきらい）小学校は、3階建ての校舎が大津波の大被害を受けたが、当時、校内にいた児童71人と教職員は全員避難して無事だった。

同小は、校舎裏側の市道よりも低い場所に建っているため、保護者から津波襲来が心配されていて、大船渡市議の平田 武氏（当時65歳）は、2008年頃から越喜来小学校に津波対策用の非常用通路の設置を訴えていた。その通路は昨年12月に完成したが、残念なことに平田市議は完成9日前に亡くなられた。

3月11日の大地震の時、児童たちはこの避難通路を使って逃げたため避難誘導がスムーズに運び、児童たちが高台に避難した直後、黒い波の巨大津波が校舎に押し寄せ、その非常用階段もろとも校舎は大破した。間一髪の出来事で、多くの命を救ったのは、念の為に、平田市議が勧めた『非常用通路』であった。

東日本大震災で、片親を亡くした遺児は1,295人、両親を亡くした孤児は229人にのぼる。同じように津波被害のあった各地域でも、その津波に対する防災教育と対策の差が出たのである。

奈良県は内陸部に位置し、津波の心配は全く無い。しかし、海岸近くのリゾート地に旅行することもある。津波の怖さ、危機意識をしっかりと胸に刻み、万全の備えをしましょう。（ネットニュース一部抜粋）

《そなえよ、常に》